

6. 神経系の疾患 (G620)

文献

辻川真弓、中村啓子、堀口美穂、他. パクリタキセルによる末梢神経障害に対する温灸セルフケアの効果. *日本統合医療学会誌* 2016; 9(2): 180-187. 医中誌 Web ID: 2017044515

1. 目的

パクリタキセルによる末梢神経障害に対するセルフケアとしての温灸が「しびれ」および QOL に与える影響を明らかにする。

2. 研究デザイン

非ランダム化比較試験

3. セッティング

がん診療拠点病院 3 施設・がん化学療法認定看護師が在籍する 3 施設、日本

4. 参加者

パクリタキセルの初回投与を受ける患者 48 名

5. 介入

Arm 1: 介入群 (末梢神経障害出現後 7 週間、陽谿・神門・衝陽・太谿に火を使わないシール式の温灸を対象者自身で週 3 回・1 回 2 時間実施)

Arm 2: 対照群 (温灸を使わない)

長期間にわたり自分自身で継続して温灸を行う必要があるため、温灸を試みたいという本人の意思が必要であると考え、ランダム化せず対象者自身に選択させた。

6. 主な評価項目

しびれの程度は 0~10 の数値評価 (NRS)。気分プロフィール尺度 (POMS) 短縮版、SF-8 アキュート版。

7. 主な結果

介入群 32 名 (男性 11・女性 21、56.8 歳±11.01)、対照群 16 名 (男性 5・女性 11、56.7 歳±6.15)。介入群のしびれ NRS の変化を温灸前後で比較すると、両手両足ともに温灸の主効果は有意であったが、交互作用は有意でなかった。介入群 (温灸後) と対照群との比較では、両手で交互作用が有意、週数による主効果は両手両足で有意だった。POMS-T 得点と SF8 得点の観察期間中の変化は、両群間で有意な差を認めなかった。

8. 結論・意義

パクリタキセルの蓄積量増加に伴い、しびれは両群ともに増強する傾向にあったが、両手のしびれは、温灸により改善する傾向を認めたことから、温灸の効果が示唆された。温灸やその効果はセルフケア行動の動機付けとなり、治療完遂を支援するセルフケアになり得ると考えた。

9. 鍼灸医学的言及

選穴の理由は、いずれの経穴も解剖学的に両手・両足の末梢神経障害が生じている部位の近くに位置しており、露出しやすくかつ対象者自身で部位を確認しやすいこと。

10. 論文中の安全性評価

記載なし

11. Abstractor のコメント

NRS 平均値は、右手で 1 週目温灸後 1.9→7 週目 2.3 vs. 対照群 2.1→3.2、左手で 2.0→2.3 vs. 2.0→3.3 と、確かに用量依存性に増えるしびれ悪化の度が温灸群で少なく見える。一方、SF-8 で見た QOL に差がないことを考えると、この 0.7~1.0 のしびれ悪化の差は臨床的に大きな差とは言えないかもしれない。しかしそれでも、著者も述べているように、効果を実感した患者にとって、がん治療の完遂を支援する手段としては有用であろう。がん治療の補助的ケア手段の模索と検証には重要な視点である。

12. Abstractor and date

山下 仁 2022.3.12